挨　拶

理事長退任にあたって

前理事長
相　澤　好　治*

本学会は1992年に石川　哲初代理事長の下に発足し、化学物質過敏症など環境起因性疾患に関する調査・研究の情報交換を行ってきました。2002年から宮田幹夫理事長、2006年から小生がそれぞれ４年間理事長を務めましたが、この度２期の任期を終了して坂部　貢新理事長に後を託すことになりました。今までの４年間に続き今後も勤務先の学事が多忙を極め、学会の責務が果たせない可能性が大きいことと、幸い坂部新理事長を始め、学会運営に積極的な理事が多く、交代に支障がないと判断した次第です。坂部貢新理事長は、東海大学に異動後も北里研究所病院で化学物質過敏症の診療を続けておられ、卓抜したアイデアで本学会の発展を実現していただけると確信し、また期待しています。４年間にわたり、顧問、理事、評議員、会員の皆様方には学会運営に大変ご尽力を賜り、厚く御礼申し上げます。

化学物質過敏症と病態の類似するシックハウス症候群については、厚生労働省科学研究費補助金で、疾患概念の整理、検査法、病態生理について進歩が見られましたが、化学物質過敏症については、保険病名として認められるようになった一方、疾患概念が十分確立されておらず、研究の進展も速やかでありません。本学会の果たす役割はその面で、学問的にもかつ社会的にも重要視されています。

理事会、評議員会、総会で承認を頂きました学会専門医制度については、具体的な施策を打ち出すことができずに任期終了を迎えてしまい、申し訳ないと思っています。国が進めているシックハウス症候群患者の公営住宅への一時退避入居制度にあって、専門医師の診断書が必要であり、本学会で専門医制度を立ち上げることは時宜を得たものと考えられます。専門医制度とこれに伴う講習会を実行して頂けば、減少傾向が見られる会員の増加も期待されるところです。

人の健康要因には、遺伝、環境、生活習慣が挙げられますが、今夏の暑さは環境の重要性を国民に強く感じさせたと思います。暑熱は熱中症などの直接影響だけでなく、化学的環境や動植物の生態系にも影響を与え、感染症の分布もいずれは変化してくると予想されます。臨床家は個別の診療だけでなく、適切な診療を行うために集団を把握することが必要となると思います。したがって本学会の担当領域は、今後拡大すると考えられますので、臨床系の学会に本学会をアピールし、存在感を示すことも必要と思われます。

最後になりましたが、ご協力頂きました諸氏に心より感謝し、本学会の益々のご発展を祈念いたします。

*学校法人北里研究所常任理事、北里大学副学長、医学部衛生学公衆衛生学教授

挨　拶

日本臨床環境医学会理事長に就任して

理事長
坂　部　　貢*

ご指名により、2010年７月より日本臨床環境医学会理事長に就任致しました。 相澤好治直前理事長から副理事長に任命され、微力ながら学会運営のお手伝いを４年間させていただきましたが、今回は理事長という重い責務を背負うことになりました。本学会は、「臨床」を視野に入れた「環境健康影響」を学際的に探究する本邦唯一の学会です。医学系と工学系が互いに刺激し合い、時には美しいハーモニーを繰り広げながら、切磋琢磨して学会を築きあげてきました。一時期は、新入会員の増加よりも退会者の数が勝り、好ましくない状況になりつつありましたが、学術集会も年々充実し、それぞれの大会長が学術的趣向を十分にこらして開催された結果、会の活性化が徐々に実現されている状況にあり、私も理事長として「頑張らねば」と気持ちを引き締めています。

現在学会員には、日本を代表する環境医学・建築工学に携わる方々が、多く名を連ねておられます。これは本学会の特徴であり、大きな財産と言えるでしょう。会員全ての方々が、「臨床環境医学」の発展を願い、心からこの学問の楽しさを共有することが、本会へ参加する意義であると思います。

どうか、会員皆様の関係者で「臨床環境医学」に関心・興味のある方には、是非お声をかけていただき、来年20周年を迎える本会への参加をお誘い下さい。

微力ではありますが、皆様と共に本学会の発展に尽くすことをお約束いたします。

*東海大学医学部教授、北里研究所病院臨床環境医学センター長